

『文化を映す鏡を磨く―異人・妖怪・フィールドワーク』

佐々木 高弘

本書は、現代を代表する文化人類学者・

民俗学者である小松和彦の古稀を記念とした論文集である。本書の特徴は、口承文芸をはじめとする様々なタイプの言説が、いかに現実の社会や人々と強く結びついているのかを探求しようとする点にある。それはまさに小松が『異人論』等で示した「説話や民話などの物語の内側から見いだされたメカニズムを、民俗文化のなかに実際に確かめる」議論となろう。

「まえがき」を担当した山泰幸は、本書の構成が小松の弟子たちが大きな影響を受けた四つのテーマ（「異人論」「妖怪」「図像と象徴」「フィールドワークからの視座」）からなる点を、小松自身の関心の移り変わりや、所属先との関係から指摘し、それぞ

れのパートについて小松の代表的な著書

「異人論」、「憑霊信仰論」、「妖怪学新考」、「いざなぎ流の研究」等と関わらせながら解説している。

さて、ここでは各パートごとに紹介していきこう。ちなみに各パートの冒頭には、小松の研究と関わらせながら執筆者の論考を紹介する短い解説が付けられている。

一 異人論

大阪大学時代の代表作『異人論』に影響を受けた研究者四人がこのパートを担当する。まず川上郁雄は、「移動する子ども」という記憶と社会」のなかで、移民・難民の大量人口移動を異人という視点から論じる。小松の異人の類型化をはじめ様々な文化人類学や社会学などの議論を紹介する論

考で、まさに現代の世界、そして日本が直面する問題を論じている。

橘弘文の「開かれた儀礼と伝説」は、福井県小浜市矢代の手杵祭の伝説と儀礼の関係について考察している。この儀礼の伝説は、まさに小松が『異人論』で紹介した異人殺しのフォークロアである。しかしこれまでの研究においては、儀礼に重点が置かれ伝説は無視されてきた。また本来の伝承が異人殺しであったのが、近年において異人歓待の話へと変容した点も、小松の仮説通りだと指摘している。

村上和弘の「読み替えられる「国境の島」」は、その副題にもあるように「戦後における対馬イメージの変遷」をテーマとしている。今日の対馬は「日韓交流の島」とされているが、そこに至るまでは様々な時代の影響を受け、「要塞の島」「自然と歴史口マンの島」等、幾たびも変遷してきた。「朝鮮通信使行列」の登場で交流の島となったが、実はそこにも反発があった。これらの変遷を小松の異人論から見つめ直す。

魯成煥の「韓国で栄えた日本の花札」も、

やはり『異人論』の影響を受けている。ここでは異人同様に異文化にも歓待と排除があるとの視点から、植民地時代の韓国における日本文化の受容と排除をあげ、その中でも最も大衆から受け入れられた花札を事例に、その後の花札の絵の韓国人の解釈や、韓国知識人たちの花札への対応、あるいは愛国者たちによる花札排斥運動などが紹介される。その上で、一般民衆の文化を受け入れる力の重要性を説く。

二 妖怪

本パートには国際日本文化研究センター（以下、日文研）で指導を受けた四人の研究者が登場する。一人目はマティアス・ハイエクで、論考は「異形と怪類」。江戸時代中期に成立した日本最初の絵入り百科事典『和漢三才図会』の怪異の分類に注目し、小松が提唱した「個別の妖怪にまつわる信仰や表象、または言説といった知的営為が持っている意味と役割を、時代ごとに研究する必要性を論じ、人間が作った「妖怪文

化」を研究する「妖怪学」を「人間学」とする見解を本研究においても応用できるとする。その上で本百科事典が怪異を妖怪や異人と同様に、他者の再形成の一つの現れと捉える。

香川雅信「妖怪としての人形」は、十八世紀後半から妖怪が娯楽の対象となり様々な「妖怪玩具」が登場する中、なぜ人形がその対象から外されたのかに注目する。そして江戸時代の怪談から、現代の人形供養とは異なる呪具としての人形という近世の日本人の人形観が提示され、「人形が「この世」ではなく「あの世」に属するものであつて、完全に人間のものとなることはい絶対的な（他者）である、という認識」が、対象から外された要因だと指摘する。今井秀和「妖怪」を探すということ」は、妖怪探しの代表的なツールとして小松が主導した日文研の「怪異・妖怪伝承データベース」等があるとしたうえで、この「妖怪探し」という行為が、前近代から存在した点を事例を挙げながら指摘し、そこに時代や当事者の態度の違いがあることを

見だしている。また現代のインターネット上の妖怪同様に、近代以前にも創作が混入していた点も示し、それら情報を享受する上での限界と可能性について論じている。

飯倉義之の「神なき時代の妖怪学」は、柳田国男が妖怪を「神の零落」とした民俗学的定説に、小松が異議を唱え、妖怪が神へと変容する指摘を紹介。「人々に祀られている超自然的存在が（神）であるのに対して、人々に祀られていない超自然的存在を（妖怪）と呼ぶ」との小松の見解から、現代の「ネットロア」で語られる妖怪譚には、このような異常事態を神として祀る「始末」の仕方が欠如しているとみる。神なき時代においては（妖怪）は日常を壊滅する存在でしかなく、共存の営為は意識に上らない。その一方で創作のキャラクターとしての「妖怪」は、多くの人に癒やしすら与える存在として描かれる。こうした重層的な怪異・妖怪文化に、神なき時代の妖怪学は対峙しなければいけない」と今後の妖怪学の課題を提示している。

三 画像と象徴

小松の日文研での仕事の一つは、広く一般に妖怪の画像資料を公開することであった。この仕事の恩恵を受けた研究者たちがこのパートを担当する。

徳永誓子「童子と鳥畜」は、中世の絵巻物『融通念仏縁起』に描かれた毘沙門天とその従者として描かれる、美豆良の髪型をした子供と、鬼の姿をした二人の従者の画像に焦点を当てる。三十を超える写本を比較し、「鳥畜善願段」で描かれた「鳥」と「鼠」がこれら従者の本来の姿であったとし、本縁起が動物までも救済の対象としていたことを読み取っている。

木場貴俊の「開放される「化物絵」」では、江戸時代に描かれた妖怪画を「化物絵」としてとらえ、「仮名草子、特に子ども向きに描かれた絵本の挿絵」、「和漢三才図会」などの「図入り事典」、土佐派や狩野派などの「絵巻」、出版の発展によって普及した絵を描く際に手本とされた「絵手本」に

描かれた「妖怪画」から、鳥山石燕の『画図百鬼夜行』や、これまであまり扱われてこなかった源瑤の『妖怪絵巻』などの影響関係が紹介される。

村山弘太郎の「象徴としての菊御紋」は、天皇の象徴である菊紋が近代初頭において、どのように天皇・皇室の象徴として位置づけられるようになったのかを、法令的な側面から検討。特に社寺における菊紋使用について、明治二年の太政官布告の菊紋使用禁止から、その後の厳格化そして緩和に至る過程が詳細に紹介されている。その上で民俗社会においては、菊紋が使用されるのは社寺に限られていたことから、宗教的なものとして捉えられていた可能性を指摘している。

松村薫子「絵本における表象と影響」は、現代の妖怪文化を考える場合、絵本や漫画に描かれた創作妖怪も研究対象から外せないとし、一九二〇～二〇一六年に刊行された約一三〇点の妖怪絵本を網羅的に分析し、子どもの妖怪イメージの変容を追う。妖怪絵本は江戸時代から存在するが、明治

から昭和初期にかけては、ほぼ恐怖の対象として描かれた。戦後になると徐々にその描かれ方に変化が現れ、一九七〇年代には妖怪と子どもが友人関係になるようなものが増え始めるという。

四 フィールドワークからの視座

ここでは再び大阪大学時代の弟子たちが登場する。手塚恵子「オーラルナラティブ研究のバージョンアップ」は、中国少数民族壮族の路上のうたの掛け合いの、著者自身のフィールドワークの知見から始まる。日本の和歌と壮族のうた、そして現代のラップミュージックを、フォーク・ソングというジャンルとして見つめ直した時、そこに何が見えるのか。西洋の叙事詩「オデッセイア」などの研究を踏まえつつ、折口信夫の「国文学の発生」論の紹介と影響を経て、長年のフィールドワークの末得られた結論は、語り物と双子の関係にある口承文芸という観点から見れば、記紀万葉のうたは西

れることが可能であり、浪花節やラップも、その延長線上に位置づけられると。

真鍋昌賢「声の力のつかまえ方」では、文字としての言葉に落とし込んだ時に失われる声の力、例えば音量、声質、発話の技法、発話者の社会的位置、場の性格などを、

口承文芸研究の立場からすくい取ろうとする口頭芸研究が模索される。その際、小松の弟子らしく文化人類学の方法論が参照される。研究対象となったのは大辻司郎という「映画説明（活弁）」者である。大辻は

従来の活弁とは違って、単なる映像の説明だけでなく、「警句」で笑わせる技術をもってスクリーンからの独立を図ったと推測する。現代の多様なメディア群に囲まれた私たちの日常におけるプロフェッショナルな発話行為の解釈学が、今後の口承文芸研究に求められている。

川村清志の「映像民俗誌における語りとその背景」は、近年の映像メディアを利用する民俗誌を取りあげ、その映像作品を完成形と見るのではなく、映像が表現しにくい背景やテーマを再度解釈し直す必要性を

説く。著者（映像制作者）自身が調査地に長く参与観察することでのみ可能となる、映像作品に示された声と語りの再解釈が、衰退しつつある石川県輪島市皆月の山王祭に関わる様々な立場の人たちを巡って紹介される。

安井真奈美「出産の「痛み」を語る声」は、文化人類学の日本研究において女性の声が生かされていないとの見解から、出産の痛みに対する女性の声に耳を傾ける。昭和初期の自宅出産から現代の病院出産まで、フィールドワークやアンケートなどからその声をくみ取る試みがなされる。かつて出産の痛みは、母や姑や近親の女性たちから教わっていたのが、現代社会においては、ラマーズ法を教える教室などで自ら学習し、反復によって身につける身体技法へと変わっていった。そして現代では、どこ

でどのように産むかは、その人の生き方に関わる問題だとし、多様な声を聞き記録し、様々な生き方が可能な社会を実現することが、このようなフィールドワークの役割だとしめくくる。このことはどこでどのよう

に死んでいくのか、という脱病院、脱医学の未来社会とも関わる問題だろう。

このように全体を見渡してみると、小松の研究がいかに広範囲にわたっていたのかが分かるだろう。しかしそれぞれのパートは分離しているようで、有機的につながっている。異人は、他者、異文化、妖怪ともつながるし、フィールドワークは執筆者の多くがその方法として使用している。

本書は一人の研究者の歩みと来歴をも思い起こさせ、さらにその時々に出会った若手の研究者たちが、どのような研究テーマを背負っていくことになるのか、それをも見せてくれる。その意味では、これから研究者を目指す人々にも読んで欲しい一冊である。それぞれの論文は紙幅の関係で、テーマを深く切り込んでいくような内容にはなっていない。が、それはそれぞれの執筆者の著書を読んでいただければいい。

二〇一八年七月 せりか書房刊

本体三七〇〇円

（ささき・たかひろ／京都学園大学）